

沙島亦人  
工を要す

往時新疆  
の文明

大なる沙  
島

状態を表彰するに似たるに非らずや。

伊犁以外の住民地は、彼の沙漠中に介在する、所謂沙嶋にして、天山又は崑崙山麓に沿ふて東西に狭長なり。沙島は自然に放擲するに於ては、到底居住生活に適せざるなり。古來幾多の人工を加へ、瘠土を化して肥沃の地としたる形迹は、歴々徴すべきもの少からず。即ち大規模の溝渠を開鑿し、遠く水を引き、盛に樹木(大部は楊柳)を植え以て炎暑を凌ぎ、空氣を調順し、建築の用に供し、燃料に用ひ、又家什を製る等即ち然りとす。

現に其の引水溝渠の巧妙なる設計、構造の精巧なる、其他植樹園の施設能く風致と衛生とに稱ひたる、當時民智の進歩文明の發達は、現代人の遠く及ばざるを示して、實に驚くに堪へたるもの有り。是等古代新疆の文明發達は、延いて其の範を印度に與へたるの影迹あるに就ては、項を改めて詳説せんとす。

沙島住民地の大なるものを東より列擧すれば、吐爾番、喀喇沙爾、庫爾勒、庫車、拜城、阿克蘇、瑪喇巴什、喀什噶爾、英吉沙爾、葉爾羌、和闐等とす。是等各沙島の間は、空漠たる沙地若くは紅柳、梧桐の叢生する鹹土所謂戈壁にして、相距る遠きは四十餘里に